

# 半導体漫遊記

湯之上隆

(219)

2016年4月から爆発的に成長を始めたメモリ市場は、18年後半に突如不況に突入した。その原因としては16年以降、インテルが10nmプロセスの立ち上げに失敗し続けており、一世代遅れで製造されてきたサーバー用プロセスが、最先端(14nm)のPC用プロセスに追いついてしまったため、14nm工場が過密状態となりプロセスの供給不足が発生し、その結果DRAMやNANDが市場にあふれて価格暴落を引き起こしたことによると分析していた。

メモリメーカーにとってこの不況はあくまで十分な黒字を確保している。にもかかわらず、その結果19年第2四半期の営業利益率を見ると、DRAMとNANDを両方持っているサムスン電子、SK Hynix、マイクロンはそれぞれ21・1%、9・9%、23・2%と十分な黒字を確保している。にもかかわらず、DRAMと東芝メモリは、四日市工場設備投資を折半してNANDを製造し、そのNANDを半分に分割して、3位のKingstonが11・5%、4位の東芝メモリが9・1%、5位のSK Hynixが9・0%、6位のマイクロンが7・1%、7位のインテルが6・4%、8位のライトンが3・6%と差がつくのはなぜだろうか？

## サムスン電子策略で大赤字の東芝メモリ

# SSD事業買収で弱点克服へ

シデントであったが、サムスン電子はこれを絶好のチャンスにとらえた。そして6社もあるNANDメーカーの弱いところに死んでもらおうと考え、18年8月以降NANDの大口取引価格を意図的に下げた模様である。筆者はこの差がNANDを基幹部品とするSSDのビジネスに起因するものと考え

している。19年第2四半期のSSD出荷台数シェアは、1位のサムスン電子が29・6%、2位のWDが17・1%、3位のKingstonが12・7%、4位の東芝メモリが9・1%、5位のSK Hynixが9・0%、6位のマイクロンが7・1%、7位のインテルが6・4%、8位のライトンが3・6%と差がつくのはなぜだろうか？

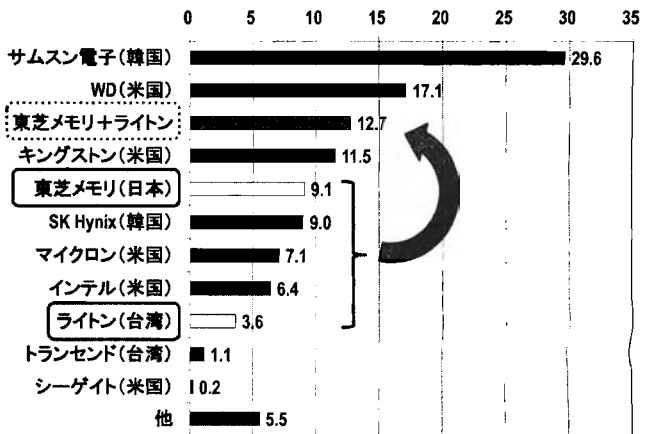


図1 SSDの出荷台数の企業別シェア(2019年第2四半期)

出所: storagenewsletter.comのデータを基に筆者作成

やっとその弱点を克服する行動に出た。東芝メモリが8月30日に、台湾のライトンのSSD事業を1億6500万ドル(約173億円)で買収すると発表したからだ。

東芝メモリは20年前半までに事業買収完了を目指すとしているが、買収が完了すればSSDのシェアは東芝メモリとライトンの合計で12・7%となり、3位に躍り出る。1位のサムスン電子と2位のWDにはまだ距離があるが、東芝メモリには現在の窮地を何とか乗り越え、サムスン電子を迫撃してほしいと思う。

(微細加工研究所・所長)